泌尿器科

（スタッフ）

部長　　：友田　稔久
副部長　：長沼　英和（４月から）
　　：波止　亮（３月まで）
主任医師　：魚住　友治（４月から）
　　：辻田　次郎（３月まで）

合計３人の医師で対応させていただいており３月末で波止副部長、辻田主任医師が退職され長沼副部長、魚住主任医師が着任されました。外来診療に関しては新患、再診とも月曜、水曜、金曜を診察日とさせていただいており火曜、木曜は休診とさせていただいております。手術日は火曜、木曜の終日と水曜午後に施行させていただいております。医師以外の泌尿器科外来のスタッフとして津崎郁弥、中島愛子の専任看護師２名で診察にあたっております。

（診療実績）

2022 年の新入院患者数は 533 人で前年比 2.4% 減、平均在院日数が 8.1 日と前年より 0.4 日増となっておりほぼ前年通りと考えます（図１）。延べ外来患者数は月平均 692 人で前年（670 人）比 3.2% 増加しましたが、新外来患者数は１年で 705 人と 2021 年（658 人）より 7.1% 増加しました。手術件数は 507 例と前年（488 例）比 3.9% 増加しました（図２）。腎（尿管）悪性腫瘍手術 44 例すべてを体腔鏡下手術で行っており、腎がん手術に対しては 27% の９例で腎機能温存を図るべく腎部分切除術を行っております（図３）。また腎部分切除術に対してはすべて体腔鏡下手術で行っており、また腎盂尿管がんに対する鏡視下リンパ節郭清も引き続き施行して低侵襲化を図っております。また前立腺がんに対する腹腔鏡下根治的前立腺摘除術を 2022 年は 25 例施行、浸潤性膀胱がんに対する膀胱全摘除術は全例腹腔鏡下で施行し、副腎摘除も含めると体腔鏡下手術は前年（88 例）比 6.8% 増の 94 例（図４）となっております。また膀胱がんに対しての小腸を用いた代用膀胱造設も施行しており QOL も含めたがん治療を行っております。また放射線科の御協力を頂いて前立腺がんに対する強度変調放射線治療（IMRT）も増加しており、がん拠点病院としての責務を果たすべく診療を行っております。小児泌尿器科分野でも体腔鏡下手術を取り入れ、先天性水腎症に対する腹腔鏡下腎盂形成術を４例、膀胱尿管逆流症に対する腹腔鏡下逆流防止術も２例施行しております。

外来診療においては３診制とし、初診患者にはまず問診を取り必要な検査を伝えることならびに再診の患者には時間予約制として待ち時間を少しでも減らすよう努めております。病診連携病院よりの紹介は電話予約をいただくことで診療がスムーズにできるように工夫しており、紹介率は 85.1%、逆紹介率は 112.2% とほぼ前年通りで推移しております。

診療上とくに気をつけていることは、セカンドオピニオンを含め、患者に丁寧な説明をして、病状を理解し納得のいく治療を選択していただくことにあります。病棟においても看護師、薬剤師と充分なコミュニケーションをとって患者の満足度の高い医療をチームで行うことができているものと考えております。その一例として、膀胱がんによる膀胱全摘＋尿路変更手術では、医師、看護師が患者に充分な説明をして手術に対する患者の不安を取り除くように努め、術後退院されてからも、通常の外来経過観察に併行して、外来看護師、皮膚・排泄ケア認定看護師を中心にストーマ外来を行って患者のニーズに応えるようにしております。

（今後の方向性）

あらゆる泌尿器領域のがんで、手術療法、化学療法、放射線療法、免疫チェックポイント阻害薬を含めた集学的治療を行っていきます。また、制がん効果のみにとらわれることなく腎（尿管）がんに対し腹腔鏡による低侵襲手術や、腎がんにおいて正常腎の温存を図る腎部分切除術、前立腺がんに対する腹腔鏡下根治的前立腺摘除術、膀胱がんに対する腹腔鏡下膀胱全摘除術となるべく低侵襲の手術を行うことでがん治療の拠点病院として活動していきます。また 2023 年度には待望の手術支援ロボットの導入も計画されており、さらなる手術の低侵襲化を図る予定です。閉塞性尿路感染症を代表とする緊急性の高い疾患に対応し、尿失禁、骨盤臓器脱などの女性泌尿器科手術や神経因性膀胱、小児泌尿器科領域など特殊性の高い領域にも適切な方針決定と手術療法を含めた治療、長期フォローも行っていきます。

（文責：友田稔久）

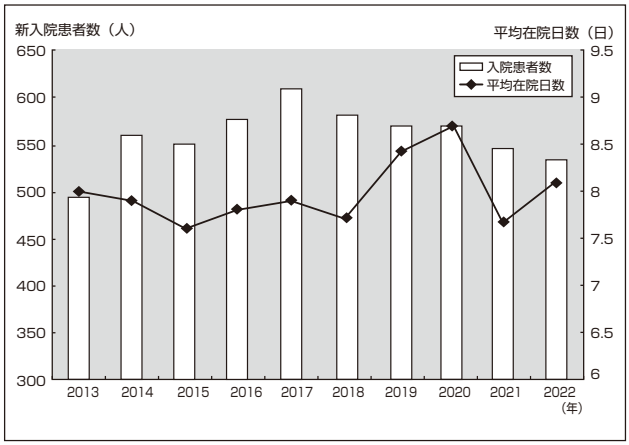

図１　新入院患者と平均在院日数の推移

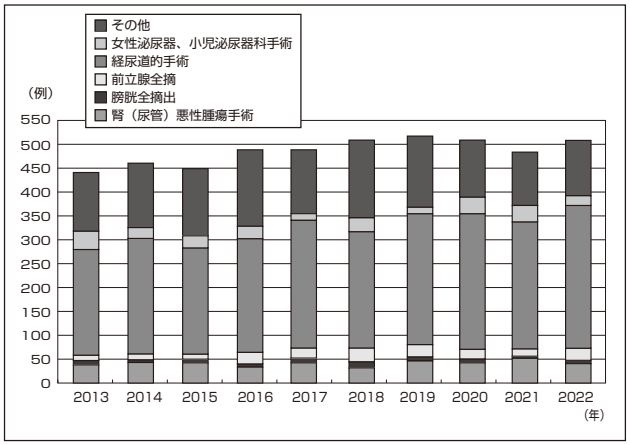

図２　手術件数の推移

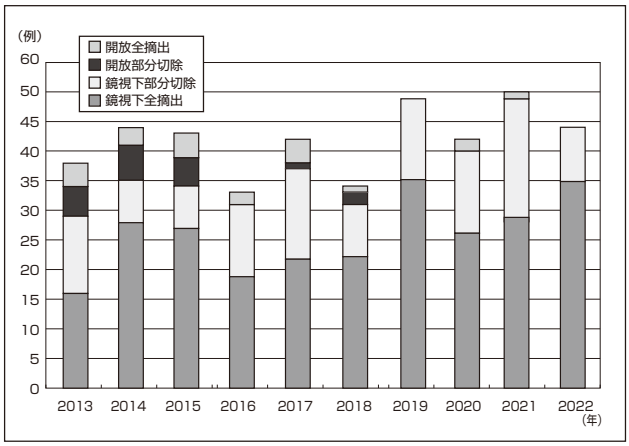

図３　腎（尿管）悪性腫瘍手術の内訳

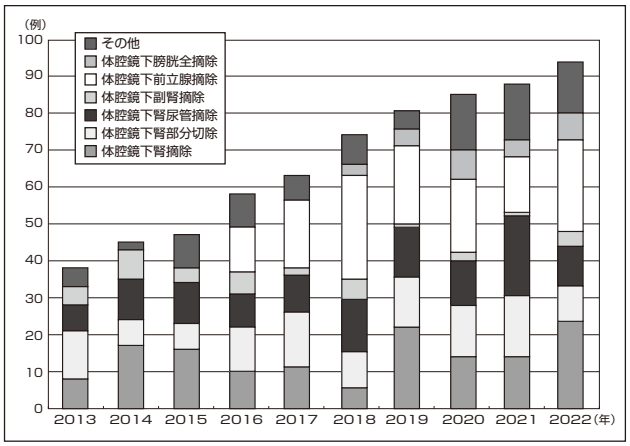

図４　体腔鏡下手術の推移